

瑤泉院を思う（弓場直彦）

羨しとの愛あいと謳うたはるる

女の幸おんなさちの明あけけ暮くれを

何故なにゆえ妬ねたむ春はる嵐あらし

妹背いもせの君きみは花はなと散ちる

黒髪くろかみ断たちて瑤泉院ようぜんいん

籠こもるもかなし南部坂なんぶざか

眠ねむりも浅あさき枕辺まくらべに

涙なみだの渴かわく日は遠とう

武士ぶしは意気地いきじを貫つらぬくも

後あとに残のこりし妻つまや子こに

君きみの思おもいは及およびしや

語かたり伝つたえる人ひとも無なし

解説 切腹した浅野長矩の妻「瑤泉院」の心境を詠った詩。

語釈 ※瑤泉院Ⅱ江戸時代中期の女性。赤穂事件で知られる浅野長矩の妻。名は阿久里。夫の死後、落飾して瑤泉院と称した。※羨しⅡ古語で羨ましい、心惹かれる。※謳はⅡうたう。声をそろえて歌う。※妬むⅡ他人が自分よりすぐれている状態をうらやましく思つて憎む。ねたましく思う。

※妹背Ⅱ夫婦。夫婦の仲。※南部坂Ⅱ瑤泉院は浅野長矩の切腹以降、実家の三次藩下屋敷に引き取られていたが、この屋敷は現在の氷川神社境内にあった。大石良雄が瑤泉院に暇乞いに訪れた「南部坂雪の別れ」の舞台としても知られる。※枕辺Ⅱまくらもと。※意気地Ⅱ物事をなしとげようとする気力、態度、意地。

通釈 羨ましい愛情と謳われた浅野長矩と妻・阿久里。この幸福を何故妬むのか春嵐。夫の君は切腹し、花と散った。私は黒髪を切り、屋敷に籠もるも悲しいし、眠りも浅く目が覚める。毎日、涙は留めなく流れ、何時になつたならば渴くのだから。武士は意気地を貫いても、後に残った妻や子に、あなたの思いを成し遂げる事が出来ない。この侘しさを語り伝える人もいない。